

### 《特別寄稿》百年前の女性日記に見る「スペイン風邪」

## 「女性の日記から学ぶ会」代表 島利栄子さん

今号では戦前から戦後の庶民の日記を全国から集めて読み解き、貴重な生きた資料として保存・活用して次世代に引き継いでいる「女性の日記から学ぶ会」代表の島利栄子さん(八千代市)に、ご寄稿いただきました。

新型コロナウイルス感染症の拡大で未曾有の事態の中、百年前にスペイン風邪を記録した女性の日記を思い出す。

## 感染や戦争・震災乗り越えた記録 渦中の私たちへ百年越しのメール

私は「女性の日記から学ぶ会」の全国「百人余の仲間と共に「現存する人々の日記を収集・保存・活用」、社会の遺産として次代に正しく譲り渡そう」をテーマに二十四年間活動してきました。提供された日記約四千点の中にその日記はある。

「吉田得子日記」は明治・大正・昭和三代に亘る女性一代の日記だ。筆者の得子は明治二十四年岡山県邑久町(現瀬戸内市)で生まれ、女学校卒業後、教師になり結婚。退職し夫と共にラジカ販売の仕事を始め、地域のリーダー的存在となり、

戦後は婦人会長や村会議員を務めた女性である。日記は手のひらサイズの懐中日記で字数は一日百字足らずだが、身辺の出来事から地域・国内・世界の状況までが卓越した文章力で手際よく記されている。スペイン風邪は第一次世界大戦中の大正七年(一九一八年)に大流行し、世界全体の死亡者数は五千万人。日本では四十万人を超えたとも言われる。得子の日記から

「流行性感冒のはげしき勢もてひろがり行く話にて持ちきり。明日の運動会も為に延期となりたり。岡山市など小学校殆ど休校。中等学校、高等学校もなり。誠に恐ろしきことになりて」。

十一月八日「休校五日間と決まる。長田さん昨夜死去したまいし。孫殿の風邪を受けられてなり」と。

大正七年十月三十一日「流行性感冒のはげしき勢波が襲来。九月一月に「マスコ買いたりしも誰もかけるを嫌がる」と人々のマスク初使用の様子が記され、「旦那様風邪にて休む」「岡の進さん助からず」「岡の進さん葬儀」とある。

日記から周りの人が次々に亡くなり、右往左往する様子が手に取るように伝わる。百年前は情報も少なく、

十一月十三日「世界初めてなりという大戦乱もいよいよ十一日休戦となりたり。将来永遠に亘る平和の基礎となるべし。新さんのおばさん死去せられ夜遅く葬儀ありたり。いずこも風邪引きにて棺のできざりしためなり」と。

後には該当箇所のみ拾ってみると「金光先生に会いお嬢様の悔み云う」「一昨夜より発熱したりという那須様昨夜死去」「入江兄様の兄弟・妹さん三人の葬儀あり」と続く。勢いは一時収

医学や衛生知識も乏しく、人々の恐怖感現在の比ではなかっただろう。得子日記にはスペイン風邪の終息の記録はない。その日その日に一生懸命な現在が淡々と記されるだけだ。その後の得子を日記から追うと、大正十一年待望の子供が誕生。十二年関東大震災勃発後、夫婦で先進的なラジカ商売へ転身。商売繁盛で太平洋戦争を生き抜いていく。

人間は常に感染、自然災害、戦争と闘ってそれを乗り越えてきた。得子日記は新型コロナウイルスと闘争渦中にある私達に「明けない夜はない」という最高のエ

ールを送ってくれている。スペイン風邪の記録に『流行性感冒―スペイン風邪大流行の記録』(内務省衛生局)が有名だ。それを読むと、うがい、マスク、くしゃみ・咳にはハンカチ、沢山の人の集まる所へは入らないなど、感染予防の方法は百年前と変わらないことに驚く。記録を活かし歴史に学びたい。

この新型コロナウイルス騒動は今後、国や専門家や文学作品で後世に伝えられるはずだが、私達も自分のコロナとの闘いぶりを「私の小さな物語」として記録しておきたい。危機に際し人はどう考えどう行動したかを、また人間のたくましさや、後世に伝えるために。

### 読者プレゼント

島さんより吉田得子日記の戦後編を5名に。応募方法は6面右下をご参照。



「時代を駆ける 吉田得子日記1907」1945 ※完売につき絶版



小学2年生の頃から日記を書き始め、現在の「コロナ禍も記し続けている島利栄子さん



「時代を駆けるII 吉田得子日記 戦後編1946-1974」